

自然ガイド片手に
歩いてみよう！
おすすめエリアを
イラスト地図で紹介します。

信州自然ガイド No.10 解説編

開田高原～木曾馬と採草地の自然

① 木曾馬を飼う

小型で温順な木曾馬は女性にも扱いやすく農家に好まれていました。昔ながらの方法で木曾馬を飼育する農家はなくなりましたが、移住して木曾馬と暮らしているお宅が数軒あります。木曾馬のやさしい表情には癒やされます。



② 冬の厩 (山下家住宅内)

高冷地の開田高原は、江戸時代から全国有数の馬産地となってきました。昭和30年代も農家はメス馬2～3頭を飼育し、毎年1歳馬を1頭売り生計を立てていました。馬の糞尿と敷草が混ざり発酵した良質な厩肥は、火山灰土からなる田畑での農業生産を維持する上でも重要でした。厩肥生産のため厩は深く掘り下げられていました。夏秋の厩肥は収穫後の水田に積まれ、空になった厩も春までに馬の頭が天井につくほど厩肥がたまりました。



④ 御嶽山を望む

御嶽山と、西野川沿いで馬と暮らした柳又集落が一望できます。今は森林となっている集落周辺の傾斜地はかつて採草放牧地でした。柳又には、旧石器時代および縄文時代草創期の遺跡があります。有舌尖頭器が発掘され、当時、シカなどの大型獣の狩猟が行われていたと考えられています。また、継続的な野焼きを示す黒ボク土の畑が広がっています。



③ 山下家住宅 (長野県宝)

馬医でもあり、多くの馬を農家へ貸し出していた大馬主の山下本家は、大きな財をなしました。現在の家は、江戸末期の1866年に建築されたもので、本棟造りの破風と懸魚が特徴的で、内部のつくりも贅沢の限りを尽くしています。山下家住宅には、同じ屋根の下で馬とともに暮らしていた当時の厩、馬の餌となるヒ工程を煮たり飲み水を温めたりした大釜、厩肥を運ぶ道具コイモ子も残されています。敷地内の土蔵は開田考古博物館となっており、旧石器時代からの遺物約3,000点を展示しています。



⑤ 再生採草地(西野下向)

近年、市民グループ「ニゴと草カッパの会」によって再生された採草地。会はニゴを象徴に、木曾馬文化とともに草地の自然環境を保全し、景観づくりにも役立てようと活動しています。



⑥ 草小屋

かつて馬の冬用干草を貯蔵して置きました。庇に乗り、上からも草を入れました。



⑦ 山の神

毎年5・6月に山の神祭りが行われます。各家には絵馬の版木があり、和紙に押し奉納しました。



⑨ 木曾馬の里

日本在来馬の一つである木曾馬を保存育成する観光牧場。木曾馬35頭ほどが飼育されています。御嶽山を背後に、木曾馬が暮らす様子を見たり、木曾馬と触れ合ったりすることができます。



⑧ 春から秋までの草カッパ (採草地)

木曾馬は粗食に耐え、野草だけでも飼育できました。夏は生草、冬は干草を主な飼料とし、それぞれ生草場、干草山(草カッパ)から採取されました。草カッパは半分に分けられ、一年毎に利用されました。利用する場所では春先に野焼きをして前年の枯草を焼き、良質な飼葉を育てました。秋にはそれらを刈り取り、ニゴ(積み上げた刈草)をつくって乾燥させて干草にしました。草カッパはワラビやギボウシなどの山菜採り、盆花採りの場所にもなりました。採草地は木曾馬の減少とともに失われてきましたが、牛飼育農家によって干草利用が続けられてきた場所もあります。採草地では、5月には黄色いミツバツチグリ、秋にはオミナエシなど秋の七草が群生します。チョウなどの昆虫の中には、1年おきの春の野焼きと秋の採草というサイクルに合わせて生活しているものもあり、この地域に特有の生物たちが暮らしています。



⑪ 昭和40年代の地蔵峠八チマキの草カッパ

干草は等高線に沿って刈られ、まず地面に並べて干されました。かつての写真からは、それがシマ模様に見えていたことがわかります。



⑩ 再生採草地 (末川大明)

現在も各地区では景観保全のために毎年、住民の手で野焼きが行われています。野焼きは地形や風向きなどに細心の注意が払われます。再生採草地では1年おきの草刈が復活しました。刈草は木曾馬の飼葉として活用されています。



⑫ 丸山馬頭観音

木曾馬は家族の一員として大切にされました。仔馬が生まれると、丸山観音の縁日に参拜のために連れて行き、無事成長するよう願いました。開田高原には馬の無病息災や冥福を祈った馬頭観音が今もたくさん残っています。

